

森村 桂

香港へ行く

森村桂 香港へ行く



〈同じ著者によって〉
森村桂沖縄へ行く（講談社刊）
13の結婚（講談社刊）
森村桂日本へ行く（講談社刊）
いわせてもらえば（講談社刊）
森村桂アメリカへ行く（講談社刊）
二年目のふたり（講談社刊）
お嫁にいくなら（講談社刊）
Lサイズでいこう（講談社刊）
友だちならば（講談社刊）
ビジョとシコメ（講談社刊）
お隣りさんお静かに（講談社刊）
青春がくる（講談社刊）
おいで、初恋（講談社刊）
ふたりは二人（講談社刊）
結婚志願（講談社刊）
チャンスがあれば（講談社刊）
違っているかしら（オリオン社刊）（角川文庫）
天国にいちばん近い島（学研刊）（角川文庫）

森村桂 香港へ行く

1970年 6月28日 第1刷発行

著 者 森村 桂

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (942) 1111 (大代表)

振替 東京 3 9 3 0

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 山晃製本株式会社

定 価 340円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1970

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0095-124081-2253 (0) (文)

目次

1	私は仲間はずれ.....	7
2	せまくて広い川.....	27
3	肌で感じたい焦り.....	47
4	社長邸にはカーテンがない.....	69
5	香港まけます.....	87
6	大金持と貧乏アパート.....	103

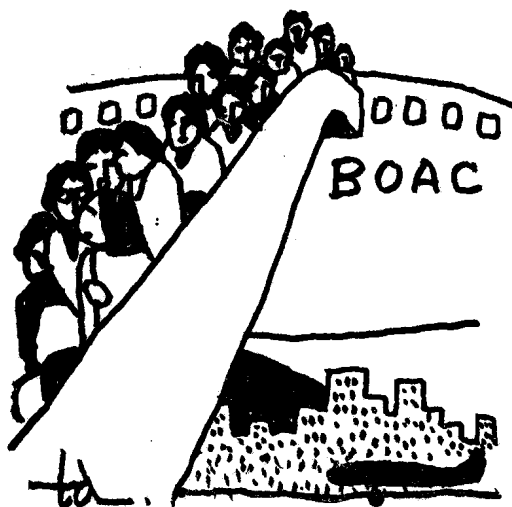
7	カチ中国に行く.....	121
8	旅行社のマージンは20パーセント.....	143
9	われ敗北せり.....	163
10	大事にされてる日本の嫁さん.....	179
11	6坪に16人の難民アパート.....	201
	あとがき.....	223

写真
宮本
唯志

装幀
宮田
武彦

森村桂香港へ行く

1. 私は仲間はずれ



私は観光旅行は嫌いである。ましてや、バック旅行など、三億円もらおうが、大の大の嫌い、一生そんなものはいらないだろうと思っていた。バカらしいじゃないか。修学旅行じゃあるまいし、外国まで行って日本人と鼻つき合せ、決められたコース歩かせられるなんて。いや、それよりも何よりも、私は決められた時間に起き、いわれた通り人の後についてバスに乗ってなど、まるで捕虜収容所のごとき、屈辱的な生活はまっ平だったのだ。

なんて、カッコいいことをいっちゃって、実をいうと、私はおなかをこわしやすいたちな上、スローモードで、だらしがなくて、忘れっぽくて、ドジで、その上、自分勝手に気まぐれでいいかげんで、おまけに不眠症でいびきをかいて、あげくの果てに、お手洗いはうーんと長くて、そのくせ神経質で、人が外で待っていると解ったら最後、いや、もしかしたら、待ってるかも知れないと思ったら最後、ビタリと止って、何日でも出なくなつてウンウン苦しむといったどうしようもない体質で、加えて、ちよつといやなことがあつたり、我慢をしたりしようもんなら、もうい

らいらとして胃は痛くなり、下痢はする、病氣になっちゃうことまちがいない、どうにもこうにも救いようのない身体だからだ。これじゃあ団体旅行なんか行けば、六十人なら六十人の人全部に、嫌われ放題嫌われるに決っているし、行ってよかったなんてことは何一つありやしないからだ。これは学校時代、修学旅行で、さんざ実証済みなのである。

そんな私が、またよりによって、観光地も俗化この上ない香港に、なんで、バック旅行などする氣になったか。さよう、ただひとつ、わが執念は餃子と焼売ギョウザ シュウマイの為である。

「モリ、香港の餃子と焼売、おいしいわよ。日本のとまるで違うんだから。生きのいいエビがたくさん入ってて、コリコリしてるのよ。豚肉なんて脂がこまかく切って入ってて、それがまた、何ともいえないの」

五年前、東南アジアに旅行に行ってきた後輩のオツコがいつてから、私は香港の餃子と焼売にとりつかれてしまったのだ。といっても私はべつに、餃子や焼売が死ぬほど好きだってわけじゃない。ただ、私に食べものの話をしちやあいかなのだ。それが、一年に一ぺんしか食べない特殊なものならいい、街を歩けば、どこを歩いても、この二つの字はとびこんでくるし、食べる機会はしょっちゅうあるもんだから、その度に、オツコの言葉がキューッと思い出されて、私はどうにもこうにも、しょうがなくなってくるのだ。

私だって、努力しなかったってわけじゃない。結婚した年に新婚旅行のやりなおしでニューカレドニアへ行く途中、香港で一時間待ち合せがあると知って、私の胸は踊った。

ところが税関が、どうしても出してくれない。仕方なく、待合室の中の売店を探したが食べものを売ってる店は一つも無い。そうだ、こと食べものとなると、何でもひらめいちゃうたちの私は、若くてひまそうな係員をつかまえていった。

「ブリーズ、バイ、シューマイ、アンド、ギョーザ」

そして、お金を渡すのだが、誰にも通じない。見かねたダンナさまが、

「中国人は漢字がいいんだよ」

といって、白い紙に、焼売、餃子と書いてくれたのだが、どうしたわけかこれがまた通じない。もつとも焼売の売を本字で書かなかったせいもあるが。私は、絵を書いたり、食べるまねをしたり、果ては作ってみるまねまでしたけれど、まるでだめ。それでも、やっと最後に、

「オオ、肉マンジュウ」

と誰かがいってくれて、

「オーケー」

それでいい、頼む、お願いだと手を合せるのだが、町に行かなければないと首を振る。そして、たちまち一時間はたち、私は飛行機に乗りこまなければならなかった。それでも私はまだあきらめない、帰りこそと思って、帰りは、待ち合せをわざわざ四時間もとって、飛行機に乗った。ところが、どうしたわけか、この飛行機が遅れに遅れて、待ち合せはわずか一五分、私たちは、焼売とも餃子ともいうまもなく、こっちの飛行機から向うの飛行機まで、走りに走らなければ

ばならなかった。

食べものに、やたら、執着心のある私は、その日以来、焼売と餃子というと、どうしても、香港のことが思い出されてならない。食べそこなっただけに、一体どんなにおいしかっただろうと、想像は想像をよんで、私は、たとえどんなことがあったって、香港にこの二つを食べに行くぞと決めていたのである。

といって、いくら私が、食べものの為には手段を選ばないたちだって、香港までの飛行機代十萬いくらでは、とうていというてい手が出ない。そこにやって来たのがこのチャンス、何げなく開いていた女性週刊誌の、

「五万五千円で、香港、マカオに御招待、六十名様を四泊五日の旅へ」

というものである。何でも、香港まで何とかパックで行くと、ホテル代からバス代まで全てふくまれて八万八千円なんだそうだ。個人で行くの、ざっと半額である。それをまた、この女性週刊誌と、あるクラッカー会社が少し負担するから、更に安くなったというわけだ。

うーむ、香港の焼売と餃子が、五万五千円で食べられるなら、悪くないな、それに、おやじさまの好きだった北京には今は行けないけど、でも、中国の気分が味わえるというのは、ちょっといい、そして、こわいものみたさも手伝って四泊五日ぐらいだったら、団体旅行もなんとかポロを出さずについて行けるのではないかという気になったのだ。

よし、決めた。応募方法は、「私のアイディア朝食」という作文をかけとある。私は、横川の

釜めしのお釜を利用して、冷やごはんにおかずをのせて、火にあたためるだけの、釜めしごはんその他を、「包丁とまな板を使わない朝食」と題して、すぐに書いた。六十名も募集する以上は、何とか、まぎれこむとは思うけど、でも、落ちるという場合も充分ありうる。私は、一度書いてはまた、書きなおし、ふつう書く原稿の時の、十数倍ものエネルギーを使って、やっと書き上げた時は、夕飯のあとコタツにあたったままこれを書いてはなおしていたもんだから、すっかり胃が痛くなってしまった。

「バカヤロウ、どうしてお前はバカなんだよ。お前は一応プロだろう」

遅く帰ってきて翌朝遅く起きたダンナさまが、びっくりしてどなった時はもう遅い。私は、速達で、投函してしまったあとだった。そうだ、そういえば私はプロだった。だけど、プロは応募しちやいけないなんて書いてなかった。

「みっともねえじゃないか。落ちたら、どうするんだ」

さよう。実は私も、出したあとで気がついたのはそれなのである。私は学校時代作文が人よりよかったってわけじゃない。大学の雑誌に投稿すればいつでも没になっていたのである。

ところが運のいいことに、この原稿を受け取ったのは偶然にも私の知ってる宣伝部のデブ黒さんだったのである。彼はその原稿を見るなり、

「ひゃッ、ひでえ字だな。待てよ……、この字」

と思ったのだそう。私が何回も書き直したにもかかわらず、それはどうしようもなく、ズバ

ぬけて、どうしようもない字であったのだそう。そして、彼はすぐに電話をくれたのである。

「どっかで見た字だと思ったんだけどよ」

私は、この選に入れたのは、多分に、このデブ黒さんの力によるものと、信じている。というのは、彼には、小百合ちゃんを通じて、大きな大きな貸しがあるのだ。いや、借りの方かな。

私がまだ結婚する前である。私は『違っているかしら』の映画化の宣伝の為に、主演の吉永小百合ちゃんと一緒に、大阪に行った。そこで一泊して、私だけ帰ることになったのだが、ニューカレドニアだとか遠い所へは行っても、大阪から東京なんて、どうやって帰っていいか解らない。その時、この、デブ黒さんがカメラマンと一緒に入って来た。ゆうべホテルのロビーで私がウロウロしていたら、

「何してるの。バーでも行かない」

と、私を誘惑しようとした、黒メガネの人相の悪いでっぷり太ったオアニイさまだ。私は、こんな男がいるから、大阪というところは、危険だと思ったのだけれど、彼にとってみれば、私が美人だから誘惑しようとしたなんてわけじゃない、小百合ちゃんを取材に来ていたから、私のことも、見て知っていたというわけなのだ。ただ知っていたわけではない。彼は私のことを、非常に恨んでいたのである。なぜなら、彼が、労音で歌っている小百合ちゃんに、外国製のビスケットを一箱届けたところ、ドカドカッと楽屋に入って来た私が、

「おなかすいちゃった、何かない」

といって、小百合ちゃんに差し出されたこのビスケットの箱を、ビリビリつと破いてふたをあけ、小百合ちゃんに一枚もあげないで、ボリボリ食べだし、公演の間も廊下にいる時も、小脇に抱えて、まったく無造作に食べていたもんだから、独身で、あわよくばと思っていた、いや、ただ、このビスケットを食べてもらうことだけで幸せですと、純粹なるまごころと愛情をささげていた彼としては、大いに、心を傷つけられ、私を見る目が、人相が悪くなったとしても、それは、また当然であつたのである。

ともかくにも、小百合ちゃんと、さよならをいいあっている時に、このデブ黒さんがまた入つて来た。そのデブ黒さんに、あろうことか、小百合ちゃんは頼んだ。

「ねえ、黒沢さん、今日、東京にお帰りになるんですよ。お願い、桂さん、無事東京駅まで送りとどけて」

「そりゃあ、ま、いいですよ」

小百合ちゃんに頼まれてうれしいものの、ビスケットの恨みと、ゆうべはまた、バーに誘つたのに、

「いいえ、けっこうです。」

と、ヤクザでも見るように、キッとにらまれて、タツタカ走っていかれて、二重に屈辱を味わわされていた彼は、なんとも、さえない顔でいった。と、私が無人島とかジャングルの中外は、まったく、方向オンチだと信じこんでいる小百合ちゃんは、やたら不安になったのだろ